

中国日本商会

みつま

# 三瀦先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



## 三瀦コラム 中国「津津有味」-8

金庸という名前を聞いて、「ああ、金庸ね」と言える日本人がどれほどいるのでしょうか。しかし、中国人なら知らぬ人はいない、と言ってよいでしょう。中華世界では大変な有名人。その小説は鄧小平も愛読、中国大陸だけで4000万部以上も売れ、北京大学には金庸小説研究授業もあり、金庸本人も名誉教授になっています。もちろん、日本人の中にも愛読者はいるし、その作品の日本語訳も出版されています。

金庸は武侠小说御三家の一人に数えられる香港の作家です。1924年に浙江省で生まれました。本名は査良鏞、一族から科挙で多くの進士を輩出した名家でしたが、その後、香港でジャーナリストとして活躍する傍ら、武侠小说の世界で筆を走らせ、一躍人気者になったのです。

金庸の主な長編小説は全部で12編あります。1955年に書かれた処女作が『書剣恩仇録』で、1972年の『鹿鼎記』で断筆を宣言しました。その作品の魅力は、息を持つかせぬ迫力ある展開もさることながら、単純な勧善懲悪小説ではなく、悪者にも救いの手を差し伸べるヒューマンイズム、フロイトなど心理学に対する深い造詣を駆使した人間描写、そして、『神鵰俠侶』に見られる吉川英治の『宮本武蔵』を彷彿とさせるビルドゥングス・ロマンであり、かてて加えて、中国文化に対する幅広い知識、中でも『鬼平犯科帳』の作者、池波正太郎と甲乙つけがたい食に対する該博な知識はそれだけで読者を魅了するに十分です。

かく言う私もその読者の一人で、ある夏、ふと『書剣恩仇録』を手にしたのが運の尽き、あまりに面白く、日夜読みふけり、その夏はとうとう金庸の長編小説読了に丸々費やしてしまった“苦い”経験があります。それ以後、人に勧めるときは、「しばし一切仕事に手がつかなくなる覚悟があればどうぞ」と言うのが口癖になってしまいました。

「ビジネスに携わる者にとって、この話は何の関係があるんだ」とのご質問もあるかと思います。これが大ありなのです。皆さんがスーパーなどで目にする商品の名前などには金庸の主人公の名前が大変よくつかわれています。何しろ、金庸の小説はカンフー映画やテレビドラマに大変良く使われており、その人気を企業が放っておくわけがありません。“小龍女”がわからなければ話にもならないのです。例えば、“郭靖”と言えば、それだけでどんなタイプの人を指しているのかわかります。ネット上でも、“我不是郭靖”とか“我不是黄蓉”などといったブログ名がありますが、その名前の付け方で、その人が何を発信したい人なのか一目瞭然です。

私の場合、金庸に対する関心が結局、＜吉川英治と金庸＞（『“宮本武蔵”は生き続けるか』2001、文真堂所収）という論文になりました。この二人の偉大な大衆文学家を比較し、私は、“情”の厚い市井の道学者が吉川英治であり、人間愛に富んだ文化人的政治家が金庸だ（もともと外交官志望で、香港特別区基本法起草委員会委員にもなっている）、と結論付

中国日本商会

みつま

# 三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



けましたが、それはそれとして、その絶大な人気の秘訣はやはり、常に読者をハラハラドキドキさせつつ、人としての成長に深い共感を呼び起こすその筆致でしょう。

今度のお正月、一杯やりながら金庸の作品に挑戦してみませんか。